



三重大学人文学部教授
山田雄司 先生

『忍者の歴史』

〈KADOKAWA, 2016.4〉
【所在】図・展示棚
【請求記号】789.8/Y19



忍者は黒装束に武器を携えたアニメや小説の登場人物。そんな思い込みを覆す研究成果を一冊の本にまとめられた山田先生にお話を伺いました。

■忍者に関する学術的な研究

まずは、先生の現在の研究をご紹介ください。

専門は日本中世史で、その中でも信仰について研究をしています。これまで日本人の靈魂観や怨霊を専門にしてきましたが、2012年から忍者の研究に携わることになり、三重大学、伊賀市、上野商工会議所で伊賀連携フィールドという組織を立ち上げ、忍者に関する学術的研究を行うことになりました。そこでは、忍術書の調査をはじめ、古記録や伝承類から実際の忍者がどのような存在であったのかという研究、それから忍者が江戸時代以降現代に至るまでのように変容してきたのかという研究を進め、日本文化の中に忍者という存在をどのように位置づけることができるのかを考えています。

■史料研究を通じた実在した忍者の学術的研究

忍者は南北朝から江戸時代まで活躍した

一著書「忍者の歴史」の紹介をお願いします。

この本は、実際の忍者がどのような活動をしたのか研究した書です。これまで忍者の研究は色々ありますが、根拠が

どこにあるのか示されていないものが大部分で、どこまでが史実でどこからが想像なのかはつきりさせないで書かれている本が非常に多いわけです。学術的研究を進めるためには、典拠となる史料類に全部あたるようにしました。さらに、書かれているからそれがすべて正しいわけではなく、後の想像として書かれている場合もあるので、史料批判をしつかりした上で、実際の忍者が南北朝時代から現れ、江戸時代の終わりまで活動していたことを明らかにしました。そのなかで一番言いたかったことは、これまで忍者というものは黒装束を着て、色々な武器を使って奇襲したり、飛んだり跳ねたりするイメージがありますが、実際の忍者はそうではなく、昼間は他の人と全く変わらないような服装をして相手のところへ侵入し、コミュニケーション能力を駆使して様々な情報を得るといっていることを行いました。夜になつたら目立たない服装を着て、塀を越えたり、堀を渡つたりすることもありましたが、基本的には情報を得て主君に伝えるということをしていました。忍者も時代とともに変容し、戦国時代の忍者、江戸時代の忍者では全く仕事が変わりますし、明治になってからは忍者の技を受け継ぐ人はますます少なくなりました。

■忍者を切り口として、日本の文化を掘り下げる

一忍者というものは、映像や小説などの想像の存在かと思いましたが、南北朝時代から江戸時代にかけて、実際に活躍していたと知り驚きました。

虚像としての忍者は江戸時代の中頃から作られてきて、黒装束を着たり、手裏剣を打つたり、さらにはガマに変身したりし、明治以降になると、小説や映画、アニメなどさまざまな分野で多様な忍者が作られてきます。忍者の実像がよくわからないために、想像で色々な忍者像が作り上げられ、そしてその忍者像にはそれぞれの時代が反映されているわけです。そうした忍者が事実と違うからおかしいと否定したいわけではなく、それもそれぞれの時代によって作られてきた忍者なのですから、それを研究することにより、忍者という切り口から日本文化に迫るというわけです。

■日本文化をもっと知りたいー世界への広がり

一世界で忍者が、なぜ注目されているとお考えですか？

海外ではどこでも忍者がとて人気があるということを感じます。それはいくつか理由があるのですが、アニメの忍者ハットリくんやNARUTOが流行ったり、それから世界においては、忍術が空手、剣道、柔道などと同じような日本の武術の一つとして捉えられていて、道場に通っている人も数多くいます。さらにはヨーロッパの人にとっては、遠く離れた日本に神秘的な忍者がいるので知りたいという興味関心を持たれている方もいらっしゃると思います。

■毎日の地道な積み重ねから、大きなことを成し遂げる

一忍者の文化が現代日本にどのように生かされているとお考えですか？

「忍(しのぶ)」という漢字は、下に「心」が、上には刃(やいば)が置かれています。これはいかなる危機的状況にあっても動じない心が大切だということを示していると言われています。そういう、辛抱する、我慢する、耐えるということ

■研究のヒントは、日常の色々な所にある

一三重大学生へメッセージをお願いします。

日本の職人さんたちが一生かかって自分の仕事をコツコツ行っていくという価値観と密接に繋がっていると思っています。実際の忍びの人たちは、日々鍛錬を積み、本を読んだり勉強したりすることを毎日欠かさず、忍び込むにあたって、命令されたからすぐにはばつと忍びこんで何か情報を得てくるわけではなく、毎日毎日地道に通って何か変化がないのか、日頃から地道に活動している人達だったわけです。その積み重ねで、忍者は最終的には天地を動かすくらい大きなことを成し遂げると「三川集海」にも書かれています。そうしたことが、日本人の心のあり方と繋がって、忍者は日本文化を代表する存在だと考えて研究を進めています。

忍者という存在は、巷ではよく知られている一方、学術的な研究はなされてきませんでした。なぜ行われなかったのかと言え、研究者の人たちは、忍者というのは子供を楽しませる想像の世界の存在で、研究するに値しないという、恐らくそういう認識があつて研究がされなかったと思います。実際に研究してみると、少なからず史料が残っていますし、日本文化の中で、非常に重要な位置を占めているということがわかってきました。ですから、固定観念にとらわれないで、自由な発想で研究に取り組んでもらいたいと思います。研究のヒントは身の回りにあるわけですから、色々なことに興味・関心を抱くことによって、新たな方向というものが見えてくるのではないかと思います。まわりの人がやっているからそれに倣って同じことをするということではなく、自分自身で新たな研究対象を見出していくということが非常に重要ではないかと思っています。

山田雄司先生プロフィール

三重大学人文学部教授。1967年静岡県生まれ。京都大学文学部史学科卒。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科修了。博士(学術)。1999年三重大学講師、准教授を経て2011年より現職。専門は日本古代・中世信仰史。主な著書に『崇徳院怨霊の研究』(思文閣出版)、『跋扈する怨霊』(吉川弘文館)、『怨霊・怪異・伊勢神宮』(思文閣出版)、『怨霊とは何か』(中央公論新社)、『忍者の歴史』(KADOKAWA)などがある。

ここから広げよう!!各学部の先生からのオススメ本

READING LIST



人文学部 相澤康隆 先生



三嶋輝夫 著
『汝自身を知れ:古代ギリシアの知恵と人間理解』
日本放送出版協会、2005年7月出版
【所在】図・開架・図書
【請求記号】131/Mi53

タイトルの「汝自身を知れ」という言葉は、デルフォイのアポロン神殿の柱に刻まれていた格言として知られている。本書は、古代ギリシアの哲学と文学の代表作を手引きとして、そこに含まれる「知恵」と「人間理解」を紹介するものである。二千年以上の隔たりがあるにもかかわらず、彼らの言葉はいまなおわれわれの心に強く訴えかけるものがある。古代ギリシアに関心がある人には一読をすすめる。

教育学部 須永進 先生



津守真 著
『子どもの世界をどうみるか:行為とその意味』
日本放送出版協会、1987年5月出版
【所在】図・開架・図書
【請求記号】376.1/Ts73

幼児理解へのアプローチは、人間科学の命題の一つとされている。本書は、子どもに寄り添い、その行為を手がかりに考察を試みようとする質的研究の先駆的取り組みといえる。なかでも、子どもの行為の背景にある基本的な生活体験の減少を指摘し、子どもの豊かな成長・発達への影響に言及している。子育ての難しい時代のなかで、「子どもの世界に参与する」大切さに気付かせてくれる書である。

医学部 北川亜希子 先生



稲垣司 著
『やるっきゃない!俺たち県庁防災対策部』
マーブルブックス、2016年7月出版
【所在】図・開架・図書
【請求記号】369.3/152

三重県の防災対策の前リーダーが、広く一般にその実践の軌跡を熱く語っている。行政職が必死で防災対策を力強いものにした過程や東日本大震災の現場での奮いに対する実践の紹介である。防災対策として三重大学も三重県と組んで実践しており、私自身も産学官連携事業として県内の自治体、企業ともに事業に参加しているが、県の防災対策は垣間見る程度であり、得る示唆は大きく感銘深い。

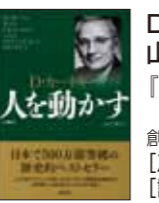
工学部 成瀬央 先生



鶴戸口英善、川田雄一、倉西正嗣 著
『材料力学』
裳華房、上巻1957年5月、下巻1959年3月出版
【所在】図・開架・図書
【請求記号】上巻501.32/U29/1、下巻501.32/U29/2

材料力学は、基本構造部材である梁や柱、板などの変形や強さについての力学であり、さまざまな構造の設計に必須である。本書は、私が学部2年生のときの教科書であった。その20年後、この分野にも関連する研究を始めたが、それ以来、研究用の専門書として利用している。本書は約60年前に発行が開始されたにもかかわらず、今なお教科書、専門書として利用したいことに驚かされる。

生物資源学部 伊藤智広 先生



DALE CARNEGIE 著
山口博 訳
『人を動かす』
創元社、2016年1月出版
【所在】図・開架・図書
【請求記号】159/C19

今回紹介するこの本は1937年に発売され、現在でも売れ続けているロングセラーの自己啓発書です。皆さん、学生生活の中で多くの人と接していることでしょうか。これまでに人間関係で悩んでしまったことはありませんか?答えが出なかった人がいればその答えも見えてくるような内容です。人と話すのが苦手な人、起業化して多くの仲間と時間を過ごしたい人は是非一度読んでみてください。

教養教育機構 奥田久春 先生



ベネディクト・アンダーソン 著
加藤剛 訳
『ヤシガラ碗の外へ』
NTT出版、2009年7月出版
【所在】図・開架・図書
【請求記号】289.3/A46

教養の一冊ともいえる『想像の共同体』の著者が日本向けに書き下ろした自伝的内容。自らの地域研究を振り返り、学問において大切なことを教えてくれる。既存の分野や制度という港に安住せず、自ら風を探し捕らえようという冒険精神、自己批判の姿勢、そして「何かが違う」という異質性、多様性への気づき。学問を志す若い人もヤシガラ碗に籠らぬよう本書を手にとって視野を広げてほしい。